

## 北海事件

著者	宮永 孝
出版者	法政大学社会学部学会
雑誌名	社会志林
巻	50
号	4
ページ	163-198
発行年	2004-03
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10114/6174">http://hdl.handle.net/10114/6174</a>

## 北海事件

宮 永 孝

日本史上、国難とよべるような大事件がいくつか起っている。まず十三世紀に蒙古のフビライがくわだてた日本侵寇<sup>しんこう</sup>、ついで二十世紀初頭に満州（現・中国の東北部）や朝鮮における権益と支配権をめぐってロシアと争った日露戦争、そしてさいごに日本の存立と国体護持、大東亜共栄圏建設をスローガンに始めた、こんどの太平洋戦争と敗戦の結果、わが国が連合国側によって占領され、その後しばらく間接統治をうけたことなどである。

元寇<sup>げんこう</sup>の役では、御家人の奮戦と大暴風雨のおかげで、日本はからくも蒙古軍の侵寇をくいとめることができた。日露戦争ではきわどいところの差でロシアに勝ち、アメリカの取りなしにより和平にもちこみ、戦争をおえることができた。もし戦争をつづけていたら日本は遠からず破れ、多額の賠償金の支払いをよぎなくされたうえ、領土を割譲していたことであろう。

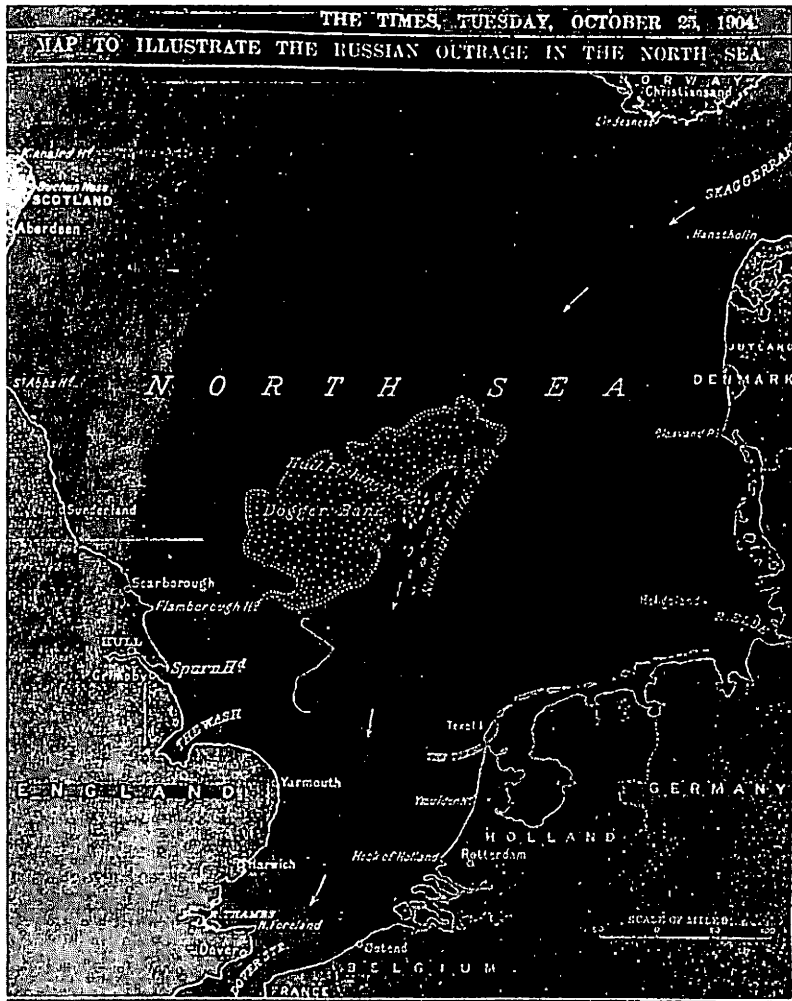
国際世論が存亡の崖ぶちにあった小国日本に好意をしめし、救いの手を差しのべるきっかけとなったものは、二つある。一つは旅順の陥落と奉天会戦の勝利、もう一つは日本海々戦における勝利であった。

日露戦争末期、ロシアのバルチック艦隊の東征のニュースは、日本人をふるえあがらせた。日本艦隊がロシア艦隊と闘って勝利をうる自信などはなく、もし敗れでもしたら、日本の命取りになること必定だった。だから日本人は安閑としてはいられず、日本社会に緊張がみなぎっていた。

一方、ロシア側も長途の航海にたいする不安に加えて、日本艦隊が待ち伏せしているといった流言蜚語にまどわされ、戦々兢兢とし

得に狂奔したことは史書にあるとおりである。とくに十九世紀から二十世紀にかけて、列強がつぎなる植民地として注目し、触手をのばしたのは清国（現・中国）であった。

かつて列強のほとんどは、自国の領土や勢力範囲をひろげることによりきゅうきゅうとし、侵略的傾向がつよかった。いわゆる、



『タイムズ』紙（1904・10・25 付）が報じた北海事件の説明図。  
写真の中央が「ドッガーバンク」とハルの漁船群。矢印はバルチック艦隊の進行方向をしめす。

ていた。ロシア兵は本国を出港したときから、極度の緊張を強いられ、艦隊の探照燈が北海の闇夜の中でたまたまイギリスの漁船団を発見したとき、それが頂点に達し、こともあろうにそれを日本艦艇と誤認し、砲撃を加え多数の死傷者をだした。いわゆる「北海事件」と呼ばれたものがそれである。

本稿は、日露が開戦するに至った経緯から、バルチック艦隊がハルのイギリス漁船団を誤って砲撃した事件（「北海事件」）について、当時の新聞報道にもとづいて記したものである。

\*

欧米列強が数世紀このかた植民地の獲

と呼ばれたものが、それである。

日清戦争（一八九四―九五）は、朝鮮をめぐる日本と清国との戦争であった。

東学党の乱（一八九四年に朝鮮南部で起った農民の蜂起）のさいに、日清両軍はそれを鎮圧するために出兵したが、のち日本軍は撤退せず、日本政府が朝鮮の内政に干渉したことから日清は対立し、日清戦争となった。

日清戦争は日本側の勝利におわたが、清国はその弱体を世間にさらすことになった。このとき列強は、清国を新たな植民地とすべく、難題を吹っかけ、權益を確保した。

明治二十八年（一八九五）四月、日本は日清戦争に勝ったあと、下関条約をむすび、賠償として遼東半島をえたが、ロシア・ドイツ・フランス三国からその返還をせまられ、やむなく受諾した（「三国干渉」）。

このときロシアは、日本から遼東半島を還付<sup>かんぷ</sup>させた代償として、一八九六年（明治二十九年）東清鉄道敷設権をえ、さらに二年後に旅順・大連の二十五年間の租借権と陸海軍の駐屯、南満州鉄道の敷設<sup>ふせつ</sup>権をえた。

ドイツは一八九八年（明治三十一年）に膠州湾<sup>こうしゅうわん</sup>を租借し、植民地化し、イギリスも同年、九竜半島（現・中国南東部）と威海衛（山東半島北岸）を租借し、ロシアの南下策に対抗するかまえをみせた。フランスは一八九九年（明治三十二年）広州湾（現・中国広東省西南部）を租借し、鉾山の採掘権や鉄道敷設権をえた。

アメリカは同年、機会均等、領土保全を原則とする

「門戸開放宣言」（その国の開港、市場の開放）

を表明し、虎視たんたん中国への進出をうかがった。

日本は清国への進出におくれをとっていたが、一八九八年（明治三十一年）台湾の対岸にある福建省を、列国に割譲させない約束をとりつけたにとどまった。

一八九九年（明治三十二年）、北清事変（義和団の乱——排外運動）が、山東省でおこり、八カ国からなる連合軍が北京を占領し、のち列強は北京に軍隊を駐屯させる權利を清国にみとめさせた。

この事象がおわったのちも、ロシアは満州から撤兵するどころか、かえって満州全土を占領しようする気配さえみせた。イギリスは、華中（現・中国中部——揚子江の中、下流地域）や華南（中国南部——福建、広東、江南などの地域）に利権をもっていたが、ロシアが南下政策を推進するにつれ、またインドの国境にまで鉄道を敷設し、軍隊や兵器を送っているのを知って、同国にたいして脅威をもつようになり、なにかとロシアと対立するようになっていた。

日本は、ロシアが満州をすっかり手中におさめれば、いずれ武力衝突がおこり、それが戦争へと発展してゆくことを懸念していた。戦争に突入したばあい、国力や軍事力の点からいっても、とうてい日本に勝目はない。

伊藤博文や井上馨などは、対露恐怖症にちかく、日露提携派とみられていた。イギリスは、ロシアが東アジアにおいて勢力を増大させてゆくのを快くおもわず、利害が一致するどこかの国と軍事同盟をむすび、ロシアと対抗する政策にかわりつつあった。

一九〇一年（明治三十四年）六月、第一次桂太郎内閣が成立したとき、桂太郎、小村寿太郎、加藤高明らの日英提携派は、ロシアをけん制するにはイギリスと提携するのが良策と判断し、水面下でイギリス政府との折衝に入った。

しかし、閣内には、ロシアとの提携派があり、意見をまとめるのは容易でなく、紛糾をかさねた。が、ロンドンにおいて、林董駐英公使と英外相ランズダウンとのあいだで、

#### 「日英同盟交渉」

がすすめられ、翌一九〇二年（明治三十五年）一月、ついに「日英同盟協約」の成立をみた。

この同盟により、イギリスまたは日本のいずれかが、第三国の一国と戦争になったばあい、中立を守るが、二国以上と戦うときは、お互い必要な援助をあたえ、参戦することを取りきめた。

一九〇三年（明治三十六年）十月、ロシアは満州への増兵をつづけていた。そしてその余勢を駆って、鴨緑江（旧満州と北朝鮮の国境を西流するヤール川）の沿岸に材木会社をおこし、その保護を名目に軍を進めた。

さらに龍岩浦（ヨンアンポ、鴨緑江河口の左岸）を占領し、砲台を設け、「ポート・ニコラス」と称していた。また満州の在留日本商店はたびたびロシア兵の掠奪をうけ、日本女性ははばかりめをうけた。この時点で日本国内では、マスコミが主戦論をあおったため

に、民衆のあいだにロシア討つべしの声が高まった。

日本政府は、朝鮮の領土保全のために、すでにこの年の八月十二日に、ロシア側に日露協定の案文を提出していた。

それは六カ条からなるものだが、その骨子はつぎのようなものであった。

第一条……満州および朝鮮の独立と領土保全を尊重すべきこと。また両国における、各国の商工業のために、機会均等主義を保持し、これをお互い約束すること。

第二条……ロシアは朝鮮における、日本の優勢なる利益を承認する。日本は満州における鉄道経営について、ロシアの特殊なる利益を承認する。

第三条……日露両国は、朝鮮における日本、満州におけるロシアの商工業活動の発展を阻害しないことを相互に約束する。

また今後、朝鮮鉄道を満州南部に延長し、東清鉄道および山海関牛莊線に接続させることがあっても、これを阻害しないことをロシア側は約束すること。

第四条……利益を保護するため、また反乱者もしくは騒擾を鎮定するために、日本から朝鮮に、またはロシアから満州に軍隊を送る必要が生じたばあい、派遣軍はじっさい必要とされる員数をこえてはならない。

また軍隊は任務をおえたら、直ちに引きあげて相互に約束する。

第五条……朝鮮において改革や善政をおこなうための助言、援助（ただし必要とされる軍事上の援助をふくむ）を与えるのは、日本の専権に属すること。

第六条……この協定は、これまで朝鮮に関して日露両国のあいだで結んだ、すべての協定に替わるべきものとする。

日本側のこの提案にたいしてロシア側は、同月二十三日、交渉の場を東京に移して行ないたい、といってきた。またロシア皇帝ニコライ二世は、新たに極東府を旅順港に置き、関東州長官アレキセイエフをその太守に任じ、軍事および外交権をあたえた。

日本政府は、交渉をペテルスブルクにおいて行なうのが、問題解決の早道とかがえていた。しかし、枝葉にこだわってはい、いたずらに時間だけがむなく経つだけで、不利な情況におちいると判断し、九月九日ロシア側の提案を受け入れ、対案の提出をもとめ

た。

それに対して駐日ロシア公使ローゼンは、九月二十三日旅順におもむくと、アレキセイエフと会い、評議を重ね、十月三日日本政府に対案を提出した。

ロシア側は、日本案の第一条から第三条まで異論はなかった。が、第五条あたりから異議をとなえ、独自の案をもちだしてきた。問題のロシア案は四カ条（第五条から第八条まで）あるのだが、その内容はつぎのようなものであった。

第五条……朝鮮領の一部といえども軍事上の目的で使ってはいけない。また朝鮮海峡の自由航行をさまたげるような兵要工事を沿岸にすることはならない。このことは相互に約束する。

第六条……朝鮮領の北緯三十九度以北にある部分を中立地帯とし、そこに軍隊を入れないことを相互に約束する。

第七条……満州およびその沿岸は、日本の利益の範囲外にあることを日本はみとめること。

第八条……この協定は、これまで朝鮮に関して日露のあいだで結ばれたものに取って代わるものとする。

ロシア側の対案は、根本において日本案とへだたりが大きく、受け入れがたいものであった。要するにロシアの主張は、満州はその勢力範囲にあるのだから、日本の干渉をゆるさぬ、というものであった。またロシア側の対案の目的は、朝鮮における日本の利益を制限することにあった。その後も小村外相とローゼン大使は、協議を何度か重ねたが、双方の主張は相容れないものだった。

十月末、日本政府は修正案を提示し、ロシア側の翻意をうながした。しかし、ロシアは朝鮮に対する主張を断乎として変えようとはしなかった。十二月になってもロシア側は原案に固守した。

年が明けて一九〇四年（明治三十七年）一月、日本政府は修正案にたいする再度の熟考と回答をもとめたが、ロシア側は返事をのばし、その間にさらに軍事行動をさかに行なった。

やがて外交によって問題を解決することが不可能と判断した小村外相は、二月五日栗野駐露公使に訓電をうった。

——日本政府は交渉を中止する。同時に保護防衛のため、最良とおもわれる行動を独自にとる。

この旨、ロシア政府につたえよ、というもので、翌六日、在露の外交官、留学生らの引きあげを命じ、ここに日露の国交は断絶した。

駐露日本公使栗野慎一郎（一八五一—一九三七、もと福岡藩士、一九〇二年からスウェーデン公使を兼ねる）は、機密書類を携帯し、館員とともにペテルスブルクをはなれるとベルリンにおもむき、当地には二月十二日到着した（在ドイツ井上公使より小村外相宛報告）。一方、駐日ロシア公使ローゼン男爵の一行も、東京を引きあげ、同日フランス郵船「ヤーラ」号で横浜を出帆した。

\*

ロシア政府は、日本が外交関係断絶を宣言したことにより、弁駁書（べんばくしょ）を「官報」に発表した。ベルリンの日本公使館は、その全文入手すると、機秘電として、本国に打電した。

それはつぎのような内容であった。

——一月十六日、日本の最終的議案を受けとるとすぐ、わがロシア政府はその審査を開始した。同月二十五日栗野公使の質問にたいする、右の提議は勅命により、二十八日に開かれる特別委員会の議にふされること。おそらく二月二日までに皇帝の裁可をえられるはずである。

皇帝は、特別委員会の決議にもとづいて、東京駐在のロシア公使にあたえるべき最終的訓令の草案を作成するよう命じた。

二月二十三日、アレキセイエフ総督へ日本との協定草案の全文と、日本の提案にたいしてわが政府が二、三変更をくわえた理由、また日本政府へ回答を交付するときに東京に在勤するロシア公使が心得ておくべき点に関して、ぜんぶで電報を三通送り、また時間を節約するために同文の電報を直かにローゼン公使に送った。

二月四日、すなわち日本の最後通牒（つうとく）を受けとる四十八時間まえ、ラムスドルフ伯爵は、日本公使にたいして、ローゼン公使に回答案を発送したことを通知した。翌五日、アレキセイエフ総督から、ローゼン公使が回答案を受けとった旨の連絡が入った。

二月六日の午後四時、日本公使はわが国の外相に二通の公文を手交した。その一通には、ロシアが日本案にたいして回答を与えることを忌避した、といった口実のもとに、談判を停止する、とあった。

もう一通には、日本公使は二月十日をもって公使館員をともなつてペテルスブルクを引き揚げるとあった。このことは外交関係の断



絶をいみするものである。これらの公文には、ラムスドルフ伯爵に宛て私信が添えてあり、それには外交関係断絶の期間は、なるべく短いことを希望する、とあった。

当日、至急電をもって、アレクセイエフ総督、ローゼン公使および北京ならびに各大国に駐劄するわが国代表に、日本との外交関係が断絶したこと、東京に在劄するロシア公使に引き揚げの勅命があったことを通報した。

各国に在劄するロシアの代表に送った電報には、結果にたいする責任のすべては日本政府にあることを伝えた。

二月五日に受信したアレクセイエフ総督から来た電報は、外交関係を断絶しても、それが敵対行為の開始を意味するものでない、といった主意であった。

しかし、日本政府は二月九日から十日のあいだに、わがロシアの軍艦と商船にたいして、だまし討ち的な攻撃を加えたが、これは国際法に違反する行為である。日本皇帝のロシアにたいする宣戦布告は、二月十一日に発布されたものである（在ドイツ井上公使より小村外相宛報告）。

## 開 戦

日本政府がペテルスブルクの栗野公使に、公使および館員、留学生の引きあげを命じた二日後の二月八日、連合艦隊の一部は仁川（インチョン、韓国北西部、ソウルの西三九キロにある港町）と旅順（リュイシュン、中国東北地区南部、黄海にのぞむ港町）港外のロシア艦を襲撃し、開戦の火ぶたを切った。

ロシア側は、日本が宣戦布告をせぬうちから、自国の軍艦を沈めたことを国際公法違反とし、駐米ロシア大使カシニーにアメリカの新聞を買収させ、日本攻撃の記事をかかせた。

その二日後（二月十日）、日本政府は、ロシアにたいして宣戦を布告し、また在外の日本公使館にも戦争をはじめたことを外務大臣名をもって知らせた。

宣戦の詔勅内容は、つぎのようなものである。ロシアは清国および各国との盟約にもかかわらず、相変らず満州を占領しつつ、そ

の地歩をますます強固なものにし、併呑する勢いである。もしロシアが満州を領布するようなことになる、朝鮮の安全は心もとない。朕は極東の平和をのぞむあまり、有司（役人）をして妥協点をさぐらせ、時局の解決にあたらせた。

ロシアとの折衝は半年にもおよんだが、同国はわが国の提案をゆずり合う精神をもって迎えず、いたずらに解決をのばした。ロシアは表では平和をとえ、うらでは陸海軍の軍備を増大し、わが政府を屈従させようとした。

ロシアが東洋の平和をのぞんでいないことは、もはや明らかである。満州と朝鮮の安全は、わが日本の存立と密接な関係があり、ここにわが政府はロシアとの国交を断ち、独立自衛のために自由行動をとることに決した。ゆえに「ロシアに対して戦を宣す」。

日本軍は、一九〇四年（明治三十七年）七月、遼陽（リヤオヤン、りやうりやう）中国東北地区南部、瀋陽（しんやう）南々西六〇キロ）や沙河（しか）における激戦でかろうじて勝利し、翌年一月には旅順をおとし、三月には奉天会戦においてロシア軍を敗退させ、どうにか戦勝をうることができた。が、日本軍の損害は大きく、長期戦にたえられる余力はなかった。

満州の野での戦いが、膠着状態（こうちやく）に陥っていたとき、日本海軍にとつての頭痛の種は、ロシア本国において新たに編成された、ロジェストウェンスキー中将がひいいる太平洋第二艦隊、いわゆる、

「バルチック艦隊」

の極東への派遣であった。

日露戦争の運命を大きく左右したものは、のちに起る日本海海戦（つしま「対島沖の海戦」）であった。

\*

一九〇四年（明治三十七年）二月五日のことである。当時、海軍大臣であった山本権兵衛（ごんべえ）（一八五二―一九三三、もと薩摩藩士）は、伊東海軍軍令部長をともない参内すると、明治帝に海軍側の戦争準備の裁下をおおぎ、のちこれを東郷連合艦隊司令長官と片岡第三艦隊司令長官につたえた。

それは日露戦争において、日本海軍がはじめて出した命令の第一号であった。

## 命 令

露国ノ行動ハ、ワレニ敵意ヲ表スモノトミトメ、帝国艦隊ヲシテ、左ノ行動ヲ取ラシメラル

一 連合艦隊司令長官ナラビニ第三艦隊司令長官ハ、東洋ニアル露国艦隊ノ全滅ヲ図ルヘシ

二 連合艦隊司令長官ハ、スミヤカニ発進シ、マズ黄海方面ニアル露国艦隊ヲ撃破スヘシ、臨時韓国派遣隊ノ海上輸送中ノ行動ハ、連合艦隊司令長官コレヲ指示スヘシ

三 第三艦隊司令長官ハ、スミヤカニ鎮海湾（韓国南東部、日露戦争ちゅうは日本艦隊の根拠地―引用者）ヲ占領シ、マズ朝鮮海峡ヲ警戒スヘシ

右伝達ス

明治三十七年二月五日 午後七時十五分

海軍大臣 男爵 山本権兵衛

連合艦隊司令長官 東郷平八郎殿

第三艦隊司令長官 片岡七郎殿

東郷は開戦まえ、舞鶴鎮守府司令長官であり、階級は海軍中將であった。

明治三十六年（一九〇三）十月十五日、かれは海軍大臣山本権兵衛から、すぐ上京せよ、といった連絡をうけた。なにごとかと、さっそく山本をその私邸に訪ねると、伊東祐享軍令部長も同席していた。

用件というのは、常備艦隊の司令長官を引き上げてもらえないか、といった内々の話であった。東郷は承諾した。その正式の発令は十月二十日であった。このとき東郷は、五十七歳。

そのころ東郷は、海軍部内でよく知られた存在ではなかった。この年の暮れ、常備艦隊は解散され、第一・第二・第三艦隊が編成さ

れ、東郷は新たに第一艦隊司令長官と連合艦隊司令長官の兼任を命じられた。

連合艦隊の司令長官には、はじめ日高壯之丞大將が候補にあがっていた。が、当人は胃腸をわるくしており、荒仕事にむいていなかった。

——そこで東郷ということに決定したわけです（斎藤半六中将談）。

そのころ連合艦隊の内部においても、東郷の名ばかりか、存在そのものさえ知らぬ者が多かった。かれを知る者は、ソロソロ罷められる、といってうわさした。

山本権兵衛は、軍務局の課長をしていたころ、

——こんにやく版（膳写板の一種、コンニャクを用いて版をつくった）。

に刷った辞めさせる將軍連中の名簿をもっていた。

その中に東郷の名がのっており、名前のうえに×印がついていた。

山本はこんにやく版の原案を、海軍大臣の西郷従道（せごまこと）のところに持ってゆくと、他の者には何もいわなかったが、東郷だけは、

——これは見所があるから残しておけ。

といった。このとき東郷の首はつながった。

日露戦争前夜、海軍をお払い箱になりかけている人物を、連合艦隊司令長官として迎える連中は、さかんに

——これはかなわん。困ったものだ。鹿児島の人だから寄こしたのだろう。

といって、うわさした。

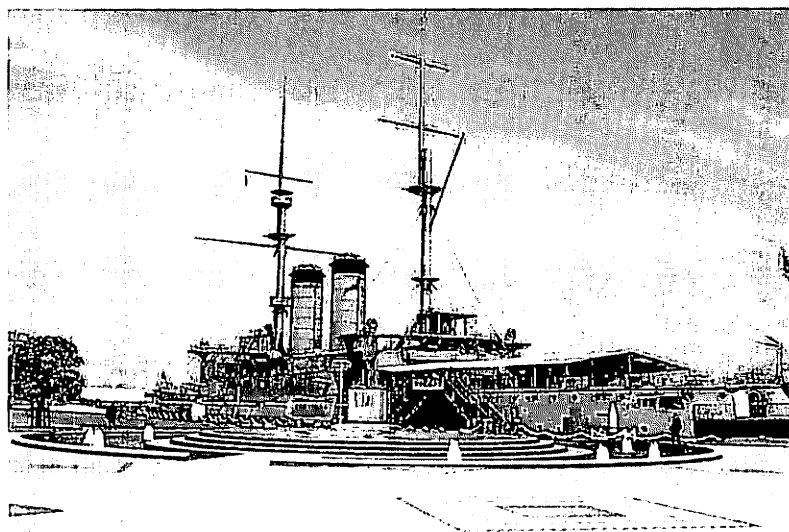
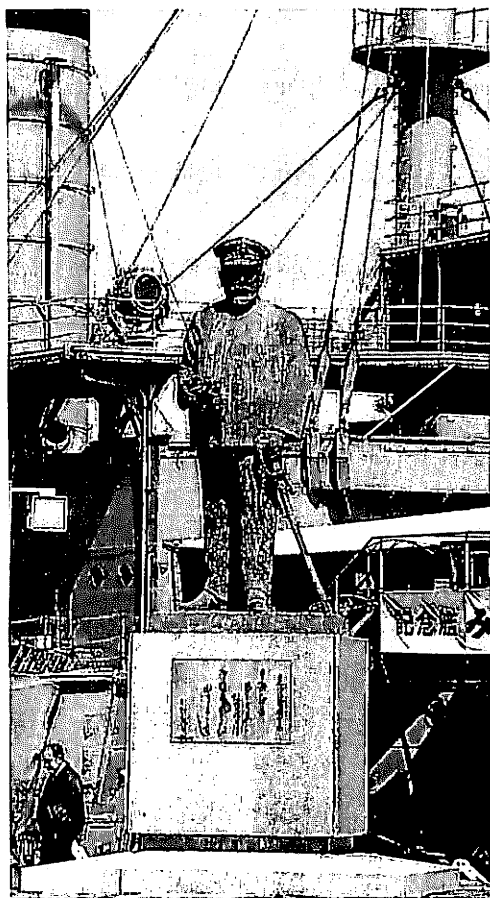
十月二十八日、東郷を佐世保駅まで迎えに出た者の談話がある。若き日の小笠原長生（のち海軍中将）は、梨羽（なつば）時起男司令官（のち海軍中将）、三笠の艦長伊知地彦次郎らといっしょに停車場に迎えに行った。

東郷が赴任したとき、兵隊の堵列（とれつ）はなく、司令官と幕僚だけの、さみしい出迎えであった。このとき名簿に×印のついていた、かつての免官の候補者——東郷は、型どおりのあいさつをうけると、先に立って埋立地をヨボヨボ下をむいて行った。

出迎えの一人、小笠原は、  
(どうも困った。こういう長官が来たんぢゃ)

とおもいながら、東郷のうしろについて行った。そして海岸からボートにのり、三笠にむかった。

東郷は旗艦「三笠」につくと、前司令長官日高壮之丞（中将）と交代した。やがてメインマストの上に中将旗がひるがえた。



記念艦三笠（筆者撮影）



ロジェストウェンスキー提督の肖像

やがて年が明けて明治三十七年（一九〇四）の正月、佐世保港内は、石炭や糧食を搭載する軍艦や各種の船舶でごったがえしていた。そのようすから戦争が切迫していることが、だれの目にも明らかであった。

外国新聞の特派員は、佐世保市内に入ることをゆるされず、海軍士官や下士官、水兵も市内に足どめされていた。

一月十日、東郷は麾下の全艦艇を灰色に塗装することを命じた。やがて日を経て、こんどは当時世界でいちばんすぐれた石炭と目されていたイギリス炭（ウェールズで産するカージフ炭）を満載し、命令をうけたのち十二時間以内に出港できるよう、準備をととのえておくように、といった命令をだした。

二月六日、連合艦隊は、海岸にならんだ数千名の見送り人の万歳三唱と軍艦マーチの演奏を聞きながら佐世保を出港し、その主力部隊は旅順口にむかった。

\*

一方、極東に派遣される太平洋第二艦隊（バルチック艦隊）も困難かつ長途の航海に出発する準備におわれていた。新旧の艦艇五〇隻余をひきい、地球を半周して極東に行くことはひじょうに辛気なしごとであった。

そのロシア艦隊をひきつれてゆく司令官の名は、ロジェストウェンスキー（一八四八―一九〇九）といった。現職は海軍軍令部長であり、侍従武官（少将、のち中将）でもあったが、現職のまま太平洋第二艦隊司令長官を兼務した。

ロジェストウェンスキーは背のたかい、男性的な容貌が目立つ、五十代半ばの提督であった。その顔はおちつきと均衡がたもたれ、測りがたく、近づきがたい人物だった。十七歳で海軍に入ってから、ほとんど拍子に階級があがり、八年後には海軍大尉となった。

三十七歳のとき、しばらく海軍武官としてロンドンのロシア公使館に勤務した。このあとかれはバルチック艦隊の砲手を訓練するための担当係将校となった。のちかれは練習艦隊長

官をへて軍令部次長となり、一九〇四年五月五日、皇帝より太平洋第二艦隊司令長官に任じられた。

このときかれの頭の中にあつた作戦は、もつとも高速の優良艦をもって出発し、まず芝罘（山東省煙台の北にある港町）を占領し、ついで旅順口の封鎖をとき、東郷の艦隊を両面から攻撃することであつた。

しかし、ロシア海軍の首脳部のなかには、艦隊を極東に遣るとき老朽艦もいっしょにもたせてやりたいと思つていた。ロジェストウエンスキーは、それに対して口あわを飛ばして防戦せねばならなかつた。

八月一日、ロジェストウエンスキーは、全艦隊および輸送船の編成をおえた。同月中旬より、九月中旬ごろまで約一カ月、機雷防禦、標的射撃など、戦略上の演習をおこなつた。

最近式兵器として、ボーコー式測距儀、望遠鏡照準器、無線電信器などを準備したが、これらの機器をあつかうことに不慣れな者が多く、じゅうぶんに活用されることはなかつた。

日本艦体の色が灰色であつたのに反して、ロシア艦はどれも船体がまっ黒であつた。さらにふしぎなことに煙突は、どれも

「黄色」

にぬられ、その先には黒のバンドが巻かれていた。のちこの「黄色い煙突」は、日本艦隊が敵味方の識別をするさいに大いに役立った。その格好は、敵艦隊と出会つたとき、あたかも撃沈してください、といわんばかりであつた。

### クロンシュタット軍港

西フィンランド湾に浮かぶコトリン島に、

「クロンシュタット」

と呼ばれる、ロシア海軍の軍港がある。

コトリン島は、長さが約七マイル半、幅は一マイル半ほどの細長い形をしている。

一七〇三年にピョートル一世が、ペテルスブルク防備のために要塞を築いたのを起源とし、その後十九世紀の中ごろ、トドレベン伯



クロンシュタット軍港（筆者所蔵の銅版画）

爵の計画にそってさらに拡張された。クロンシュタットは、十八世紀以来、バルチック艦隊の母港でもあった。

町は一般住民がくらす商業地区と海軍基地からなっていた。人口は数万人。軍人と市民とが雑居していた。町中には海軍本部、海軍機関学校、海軍病院、兵舎といった施設のほか、天にむかってぬっと突きでている教会がいくつもあった。

さらにコトリン島のまわりに目をむけると、星がちらばったように、要塞化した小さな島がいくつも見られた。それらは本城にたいする出城でじろのような役目を果たしていた。海中に浮かぶ出島——コトリン島とペテルスブルクをむすんでいたのは、毎日ひんばんに行き交う定期船であった。

一九〇四年（明治三十七年）九月五日のことである。朝から空は青々と晴れわたり、空気もさわやかであった。

けれど時どき吹いてくる風は、冷たかった。クロンシュタット軍港の碇泊地には、数十隻からなる黒々とした艦艇のすがたがあった。どの艦も一定の間隔をおいて浮んでいるのだが、その煙突から薄いけむりが立っていた。

イギリスの『タイムズ』紙が報じる記事によると、ロシア皇帝ニコライ二世夫妻は、この日の午後、皇太后マリー、皇弟ミハイル・アレキサンドロヴィッチ大公、などを伴ないクロンシュタットをおとずれた。

皇帝ツァーの一行が、魚雷艇三隻をとめない、皇室専用ヨットでベトロドボレツ（ペテルスブルクの西二九キロ、宮殿がある）からクロンシュタットにやって来たのは、ロジェストウェンスキー麾下のバルチック艦隊を観閲かんえつするためであった。



ロジェストウェンスキーは幕僚をしたがえ、皇帝のヨットをおとずれると、別れのあいさつをした（『ニューヨーク・タイムズ』一九〇四・九・二二付）。

皇帝の一行は、まず一等巡洋艦オリョーグ（六六七五トン）をおとずれたのち、戦艦オリョール（二三五一六トン）の甲板の上にあがった。そして同艦を観閲し、そのご皇室専用ヨットに乗り移り、投錨地に停泊ちゅうの各艦艇を観艦した。そのとき、各艦から、

「ウラー、ウラー（万歳）」

という声があがった。

皇帝はこのとき聖像を各艦に下賜し、皇太后は祈とう室を備えている艦に、聖器にかける自製の袱紗ふくしを贈った。

日本とロシアの緊張が高まるにつれて、日本政府は出先の機関を通じて、ロシア海軍の動静をはあくすることに努め、内偵をすすめていた。ペテルスブルクにも当然スパイが潜入し、情報収集にあたっていた。

が、運わるくロシア官憲に捕えられるばあいもあった。『タイムズ』紙（一九〇四・九・一三付）は、つぎのようなニュースをかかげた。

サンクト・ペテルスブルクにおける

日本人スパイ

二、三日前に当地において、日本人が二人逮捕された。戦争が勃発するまえから、二人はペテルスブルクの商店に勤めていた。ひとりギリシャ正教信者となり、ロシア婦人と結婚していた。

二人の住居から押収された書類から、かれらは日本の海軍将校であり、スパイ行為をしていたことが明るみになった。

このとき逮捕された日本人スパイの氏名は明らかでない。が、のち二人は釈放されベルリンにむかった、と『タイムズ』紙は伝えて

いる。おそらく当時のペテルスブルクには、日本にかぎらず各国のスパイが出入りし、暗躍していたことであろう。また『東朝』（明治37・9・23付）は、「日本間諜Ⅱ捕はる」の見出しのもとに、ロシアのナルヴァ（エストニアの港町）発の通信としてつぎのような内容の記事を伝えている。

日本人スパイ二名は、ブルガリア人のような服装をし、旅回りのドイツの音楽家に扮していたが昨日（6・27）ナルヴァにおいて逮捕されたという。かれらが携帯していた楽器オルガンから、ポーランドの海岸線を描いた地図や測量機械が出てきた。二人は事実を自白した。

一人は参謀本部附の陸軍大佐、もう一人はその従者であった。両人はペテルスブルクへ護送された。ナルヴァはロシアの要港であり、露都から鉄道で百マイル西方にあり、フィンランド湾に注ぐナルヴァ川の河口を溯ること九マイルの地に位置している。

九月十二日の午後二時、バルチック艦隊はクロンシュタットを出港した。この日、そよ風が吹き、フィンランド湾の水面は、すこし波が立っていた。淡いもやがかかったような空模様であり、太陽がぼんやりみえた。

皇帝をのせた専用ヨットは、音楽をたえず奏しながら、艦隊を見送ると、各艦も「ウラー」「ウラー」と歓呼し、さらに礼砲を発し、その音はいつまでもこだました。

翌十三日の朝、艦隊はロシア領のレーベリ（フィンランド湾の南岸、現・エストニアのタリン）に到着した。

太平洋第二艦隊は、レーベリに一カ月ちかく碇泊した。その間にロジェストウェンスキー提督は、麾下の艦隊に猛訓練を課した。

まず陣形をととのえての砲撃訓練。演習航行。洋上における石炭や水の補給訓練。夜になると駆逐艦を仮想敵艦とし、探照灯をてらし砲撃する訓練をさんざんやらせた。

レーベリは、他のバルト海の国々とくらべると、中世がまだ生きているような町であった。町は三つの地区——上手と下手、郊外から構成されている。上手地区は高台にあり、下手地区はレーベリの町の中心をなしている。そこに商人や役所、古い要塞などがみられる。

産業としては、石炭、穀物、亜麻、（ブラシなどの）荒毛、皮革などのほか、イワシの一種の「キロストロムリンゲン」を酢漬けにして輸出していた。

この海ぞいの静かな、美しい町の沖に、艦隊は一カ月ちかくも長居した。が、十月十五日、艦隊はついに重いこしをあげ、レーベリ沖をゆっくりとはなれた。この時季、レーベリではめったに太陽をおがむことができない。空はどんよりと雲り、ときどき冷たい雨がふる。そのしずくがロシア兵の外套のえりから体のなかに流れ込んだ。

町中の鐘が鳴り、軍楽隊の楽器の声も灰色の空にひびいた。要塞砲もさいごのあいさつを送った。見送るニコライ二世と幕僚たち、見送られる者も、何か妙な、重い気分につつまれていた。

ロジェストウェンスキーは、旗艦オスラービヤ（一二、六七四トン）に座乗し、そのうしろに戦艦、巡洋艦、海防艦、駆逐艦、輸送船、冷凍食糧船、工作船、病院船などが数十隻つづいた。

その翌日、艦隊はリバウ（リエパヤ、バルト海に臨むラトビアの港町）の沖に到着した。

ここは艦隊にとってロシア領さいごの碇泊地であった。さっそく石炭、食糧、資財などの積み込みがおこなわれた。

リバウは、もともとが漁村であり、それが発達してできた、中世以来の古い港町である。その静けさを破るようにやって来た、ロシア艦隊のニュースは、たちまち世界中に知れわたると、各国の通信員やスパイたちが押し寄せた。

そのため町のホテルはどこも満員だった。撮影は許可されなかったが、記事を書くことはできた。艦隊の乗組員が上陸すると、市民たちから暖いまなざしを投げられ、握手やキスの歓迎などをうけた。また時には、士官たちに聖像・十字架・聖書のほか、酒やタバコの差し入れがあった。

十六日、各艦艇の無線機が鳴った。災厄なことが起ったのである。駆逐艦「ブイストルイ」が、連絡のために戦艦「オスラービヤ」に艦を横づけしようとしたとき、操縦をあやまり、艦首でもってオスラービヤの脇腹を衝いてしまった。

この事故により、ブイストルイは艦首と前部の魚雷発射管を破壊してしまった。オスラービヤのほうは、四インチ半ほどの穴をあけただけですんだ。

十七日の朝七時すぎ、まず第一戦隊（戦闘艦隊）が投錨地をはなれ、バルト湾口のフワッケベルグ灯台のちかくに移動し、そのあと全艦隊も午前九時までにその錨地に移った。

艦隊は石炭の積載をはじめたが、昼すぎから強い南風が吹くようになり、作業をいったん中止した。

その夜のことである。ロジエストウエンスキーは、各艦に警戒を厳重にするよう命じた。何が起ったのか。いろいろなうわさが飛びかっていた。

——ロシアの艦隊を襲うべく、ずっと前から日本の海軍士官が大勢スウェーデン入りをしている。日本の潜水艦がすがたを見せた。日本の水雷艇が、灯火をけしてロシア艦隊のコースに入ってくる。今夜があぶない。

これらはどれも何の根拠もない単なる風聞にすぎなかったが、乗組員を不安におとしめていた。だから乗員は皆、着衣のまま横になり、また備砲はすべて弾薬を装填したままだった。

十八日、全艦隊は抜錨すると、デンマーク海峡のランゲランド島にいたり、デンマークとドイツの運送船数隻から、石炭や軍需品の供給をうけた。

日本人が海峡に浮流機雷をばらまいた、との情報に接していたロジエストウエンスキーは、砕氷船「エルマーク」と曳船「ローランド」に海峡の掃海作業をやらせた。

夜が明けた。

全艦隊は錨をあげると、大ベルト海峡のせまい水道を通りカテガト海峡に達した。天気はよかったが、風がしだいに強くなり、浪も高くなった。艦隊はカテガト海峡を北上するとき、ロシア兵たちはしだいに神経質になり、ただいらいらした。スカンジナビア半島の岩影に、日本艦隊が潜んでいるのではないか。

ロシア兵は昼間、海上に一本の煙、マストを望んでもどきっとした。夜は探照灯の光がたえず闇にむけられていた。

艦隊は極度の興奮のなかでまた一夜を明かし、カテガト海峡を無事通過すると二十日の朝、スカーエン岬（スガーゲンともいう。デンマーク北部、ユーラン半島の北端）に達し、投錨した。

この日の夜八時すぎのことである。

ノルウェーの汽艇が一隻、

——われ重大な公信を有する。

との信号をかけたが、旗艦にちかづいてきた。ランゲラン島（デンマーク南部にある細長い島）のルズケーベングに駐割しているロシア領事館からことづけをたのまれた、といい、漁夫のひとりがメモを一枚差しだした。

それには、

——スカーエン港から怪しい三本マストの船が出て行った。

とあった。

ノルウェー人二名が、急を伝えに駆けつける前に、ロジェストウェンスキー提督は、緊張を強いられるほどの数々の情報に接していた。

——スカーエンの沖合を国籍不明の水雷艇が四隻、うろついているのを漁夫によって目撃された。素情の知らない気球が、艦隊の上空を南西から北東によぎった。ノルウェーの海岸に怪しい船が四隻ほど潜伏している。

このためロジェストウェンスキーは、急に何事かを決意し、石炭を積まずに、スカーエン沖を出発する命令をだした。

まず駆逐艦と巡洋艦が錨をあげた。つづいて戦闘艦隊、主戦艦隊も抜錨した。全艦隊は海上に出、やがて夜をむかえるころ、ロシア兵たちは、不安と緊張の極に達していた。

水兵も士官も交代で不眠の警戒にあたり、服を着たまま、ことごとく装弾された備砲のかたわらに臥せた。静かに晴れた空からは、月光がおち、それが夜の海を照らしていた。

探照灯もたえず、暗やみに黄色い光をあてていた。艦隊は暗夜のなかを一定の間隔をたちながら、北海を南下しつづけた。

翌二十一日の朝、南西の微風とともに灰色の濃霧が立ちこめてきた。ロジェストウェンスキーは、各艦がばらばらになったときのことを想定し、僚艦を見失ったばあいの集合地点を、ダンジネス（ドーバー海峡に突きでた、イギリスの南東海岸にある岬）と定めてお

いた。

ふかい霧も正午ごろには、すっかり晴れた。艦隊は黒煙をあげながら航行をつづけていた。

日は静かに暮れて行った。

同日の夜九時ごろのことである。前夜、霧のなかで工作船「カムチャッカ」は、機関故障により仲間の艦を見うしなっていたのだが、ロジエストウエンスキーが座乗する旗艦「スワロフ」に無線をもって、

「水雷艇数隻が我ヲ追跡シツツアリ」

と報告してきた。

この急報に接したロジエストウエンスキー司令長官は、直ちに諸艦艇にたいして、水雷艇の襲撃に備えるように命令をくだした。このときロシア兵たちの間で、いろいろな想像がなされた。

（日本の水雷艇が、はたして軍艦ではない一工作船を襲うだろうか。カムチャッカを襲ってみたところで、全艦隊の行動をおくらせることはできない。日本海軍は、そんなばかなことをするだろうか。ドイツの水雷艇を日本のそれと誤認したのではなからうか。）

さらに一時間ほどすると、また無線が入った。こんどは、八隻の水雷艇によって四方から襲われた、というものであった。

ロジエストウエンスキーは、カムチャッカに、

「西に針路をとり、位置を示せ。その後の針路はそのとき与える」

と命じ、さらに何隻の水雷艇に追跡されているのか、と無線でたずねると、

「不明ナリ」

と報告してきた。

その後、カムチャッカは何度か針路を変え、ついに襲撃をのがれた、と知らせてきた。ここで無線はやんだが、これがまたロシア兵にはふしぎにおもわれた。

夜がふけるにつれて、風と波とが暗黒の海をさわがせた。艦首や舷側に波があたってくただけると、それが大きなしぶきとなって甲板

や艦橋にまでおどり上った。

甲板の備砲のそばにいる兵は、そのつど頭からしぶきをかぶった。さらに乗組員を苦しめたのは、みぞれまじりの雨である。その寒気は、骨まで通るようであり、足にラシャ（毛織物）を巻いて、寒さを防がねばならなかった。

### イギリスの漁船団を砲撃

ふたたび霧が出てきた。

神経質な艦隊は、北海のまん中あたりに位置する、

「ドッガーバンク」(Dogger Bank)

に近づきつつあった。

バンクとは浅瀬のことである。このあたりの水深は一〇メートルから三五メートルほどである。

ここは世界有数の漁場として知られている。旗艦スワロフの艦上では、だれもが日本の水雷艇がわが艦隊の位置をやっきになって捜しているにちがいない、と思っていた。

夜は暗かった。ときどき月が、雲間から顔をのぞかせた。風浪は高く、艦はよくゆれた。

二十二日の午前零時をまわったころ、旗艦スワロフの信号手が、針路方向に緑色ののろしのようなものを目撃した。それはつづけて三回も、夜について空高く上って行った。ロシア兵は、それを見てびくくりした。

探照灯をもつてのろしの方角を照らすと、数隻の船影をみたので、まず、ロジエストウェンスキーは、即刻砲撃を命じた。

「戦闘配置につけ」

のラッパが鳴った。ついで

「水雷艇だ。日本水雷艇の襲撃だ。そろそこに！ そろそこに！」

といった叫び声が聞えた。

HULL NEWS. SATURDAY. OCTOBER 29. 1904.

OUR WEEKLY CARTOON.

WITH THE BALTIC FLEET.



Russian officers receiving report of the appearance of a strange sail on the horizon.

Hull News 紙 (1904・10・29 付) より。

「地平線上にあやしい船影が見えました」との報告に、ロシア士官らが周章狼狽している様子をしめす挿絵。

さらに

「駆逐艦だ。われわれはやられた」

といった声も聞えてきた。

恐怖におそわれたスワロフの砲手たちは、最上艦橋にある六インチ速射砲のすべてを暗い海上をめがけて闇雲に射った。

やがて闇のなかで探照灯の光芒がみつけたものは、船腹を黒と赤のペンキで塗った、一本マスト、一本煙突の小型の蒸気船であった。つづいて同型の船が一隻、また一隻と照しだされた。

ロジェストウェンスキーは、左舷の四七インチ速射砲の砲手長のうしろで成り行きを見ていたのだが、漁船だとわかると、砲手長をグッとつかんで、

「コラッ! どうしてそんなことをするのだ。お前はあれが漁船だということがわからないのか」と、どなりつけた。

闇夜のなかで、いきなり襲われたのは、イギリス中部の港町ハル(キングストニアボンともいう)からやって来た漁船群であった。

砲撃をくらったのは、北海をおもな漁場としているカーサル・ブラザーズ・アンド・ビーティング会社の漁船三十隻ほどであった。この漁船団のことを、イギリス本国では

「<sup>ゲーム・コップ</sup>しやも船団」

と呼んでおり、その名は有名であった。

ふつうこの種の漁船団は、一〇〇トンほどのトロール船、四、五〇隻からなっていた。各漁船には、漁夫が八、九名のっていた。えたいの知れない大きな軍艦から砲弾を打ち込まれたとき、漁夫たちは周章ろうばいした。



漁夫の中には、じぶんたちが何者であるか相手に示すために、カレイやタラを手で高くもち上げている者もいた。それでも砲弾は、トロール船の間に落下するので、各船は綱を切って逃れようとした。

このこっけいな悲劇において、死傷者が出たし、漁船がうけた被害も少くなかった。漁船「クレイン」号のばあい、船長と水夫が、頭を撃ち抜かれて死亡した。

クレイン号の漁夫のひとり、アルバート・アルモンドは証言している。

——ちょうどベッドに戻ったとき、大砲の発射音を聞きました。甲板に出てみますと、数隻の軍艦が探照灯でわれわれを捕捉し、同時に射撃をあげてきました。わたしはふたたび船室にもどりました。水夫長のホガートがわたしのあとにつづきました。かれは階段の下まで降りてきたとき、『おれはうたれて、腕を飛ばされた』と叫びました（デニス・ウオーナー、ベギー・ウオーナー著『日露戦争全史』、妹尾太男、二谷康雄共訳）。

この誤射事件で、もっとも物の哀れを誘ったのは、クレイン号の船長の幼ない息子が、父親を捜して泣き叫んでいたことである。

漁夫たちが、その子供に父親の死をつたえるとき、胸を締めつけられるような気持だった。のちイギリス国王エドワード七世（一八四一―一九一〇）は、北海事件の犠牲者にたいして金貨二〇〇ギニーを贈った。

イギリスの漁夫たちは、はじめロシア艦隊をみたとき、自国のイギリス海峡艦隊の一部だろうと思った。また夜空に打ち上げた緑色ののろしのようなものは、綱を曳くための合図であった。

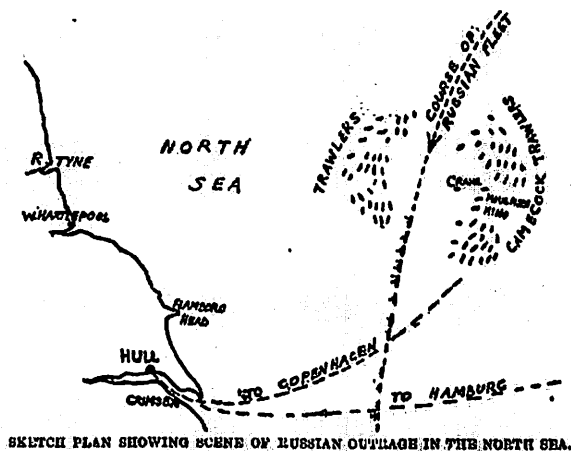
砲火はやんだ。しかし探照灯で水雷艇をさがせ、といった命令はつづいた。

砲撃中止の命令が出てから、死の静けさがおとずれた。夜はいっそう暗かった。各艦の赤や緑の舷灯のみが、暗闇のなかで光を放っていた。

砲撃は十二、三分ほどで止むのだが、時計の針は午前一時すぎを指していた。

カムチャッカからまた無電が入った。いまうしろに二隻の水雷艇がいるが、味方のものか敵のものかわからない。それは規定の灯火をつけていない。三十分ほどすると、人さわがせなカムチャッカが、艦隊の後方にすがたを見せた。

一時四十五分、巡洋艦アヴローラから無電が入った。吃水線に命中弾を四発うけた、というものである。煙突は穴だらけであるとい



SKETCH PLAN SHOWING SCENE OF RUSSIAN OUTLAGE IN THE NORTH SEA.

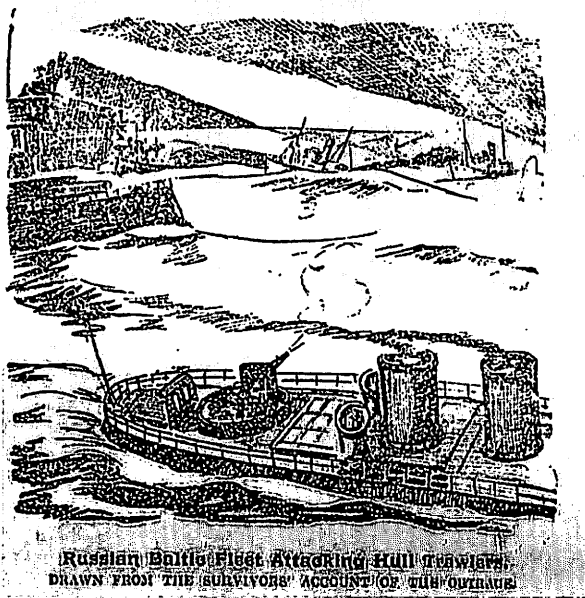
Hull News 紙 (1904・10・29 付) より。

バルチック艦隊はハルの漁船団の間に進入してきた。

## ILLUSTRATED HULL.

A SKETCH FROM LOCAL LIFE.

(BY ONE OF OUR SPECIAL ARTISTS.)



Russian Battleship Attacking Hull Trawler.  
DRAWN FROM THE SURVIVORS' ACCOUNT OF THE OUTLAGE.

Hull News 紙 (1904・10・29 付) より。

生還者の証言をもとに、挿絵画家が描いた、バルチック艦隊がハルのトロール船を砲撃している図。

う。従軍神父は重傷し、その他の負傷者も多い、と。

ロシアの艦隊が、イギリスの漁船群を襲った、というニュースは、またたく間に、

「北海事件」(The North Sea Incident)

として世界中につたわった。

まず被害者国であるイギリスに在勤する林 董(二八五〇—一九一三)公使は、直ちに小村外務大臣に宛てて暗号電報をもって、ロシア艦隊の漁船撃沈事件の第一報を伝えた(明治37・10・24、ロンドン発)。

それはハルの新聞に報じられた記事をまとめたものであった。その主旨はつぎのようなものである。十月二十二日午前一時ごろ、ス

パーン・岬(ハンバー河口の一角)の東北二二〇マイルの海面において、約五〇隻の漁船が執業中、ロシア艦隊がすがたを現わした。

同艦隊に属する水雷艇は、まず右漁船団に接近したが、臨検せずに立ち去った。ついで大型の軍艦の探海灯に照らされ、ただちに砲撃をうけた。このため漁船の「クレーン」号は沈没し、船長と水夫一名が、砲弾によって殺された。他にも重傷者がいるということである。

他の漁船数隻も損害をこわったということである。また風説によると、他の一隻は乗組員とともに沈没したらしい。ロシア艦隊は、第一の発砲と同時に戦闘隊形をつくり、二十分間砲撃をおこなったうえ、南方に進航したという。右ロシア艦隊の暴虐は、「漁船ヲ日本水雷艇ト誤認シタルニ因ルモノナル可シト一般ニ想像セラル」と。

この日を皮切りに林公使は、連日、イギリスの各紙が報じる砲撃事件の記事を収集したのち、その内容を要約して日本外務省に送り、またときには有力紙『タイムズ』の新聞主筆と秘かに会い、極密情報なども伝えられたりした。

一方、ヨーロッパ各国に散らばる日本政府の出先機関も、各紙に報じられるこの事件の報道と反響に注目し、それを電報をもって本省に伝えた。その骨子をまとめると、つぎのようになる。

ドイツ……ロシア艦隊のイギリス漁船攻撃事件は、当地においても驚愕をきたし、政府部内においてもロシア艦隊の行動にたいして忿怒の情を表明した。

オーストリア……一般国民は北海事件に驚愕し、各紙はロシア艦隊の司令官の価値に対して嘲弄的口調をしめた。ロシアは十分な賠償と陳謝をすれば、政治上の難局を惹起することはないと考えられる。今回の事件は、道義上、一大敗戦にもひとしい。

スウェーデン……北海事件が発生するすこし前に、わがスウェーデンの汽船も、ロシア艦隊に属する艦から発砲をうけた。この件については目下、露都において秘密に交渉中である。

ベルギー……世論はロシア艦隊を痛切に非難している。ロジェストウェンスキー司令官（以下、ロ司令官）は、日本の水雷艇がイギリス漁船団の中にまじっていた、といっているが、これは妄想である。

スペイン……ロ司令官は、日英間の秘密協約の存在を知った。もしイギリスが我に最後通牒を与えるようなら、わが艦隊はイギリス

と決死の覚悟で戦う用意がある。

フランス……イギリスの激昂は、ロシア側の公平無私の明解によって、漸次冷却するものと思われる。ロシアはイギリスの要求を容れて事件の解決を計るべきである。

ロシア……イギリスの各紙は、わが艦隊のことを「世界の疫病」のように見ており、すみやかにクロンシュタットに帰還するようにいつている。わが艦隊は東航するにあたり、一五〇隻ものイギリス漁船に進路をじゃまされた。イギリス側の所業は、日本にとって利益があるが、われわれロシア人にとっては不利益なものである。イギリス漁船団の中に、日本の水雷艇がまぎれ込んでいなかったと、誰が保証しえよう。

この砲撃事件のいちばんの被害者は、何の罪もないハルの漁船とその乗組員であった。

イギリスは激昂した。が、日本は内心ほくそえんだ。ロシア艦隊の醜態に、世界じゅうの怒りと嘲笑が注がれてほしかった。

北海事件は、イギリスとロシアのあいだの新たな紛争の種になりつつあった。イギリス政府は、自国の漁船団が、こともあろうにロシアの艦隊に砲撃をうけ、死傷者までも出たことを知ると、ロンドンで直ちに閣議が開られ、ロシア政府に弁明を求めた。

また漁船団の持主であるカーサル・ブラザーズ・アンド・ビーティング会社は、クレーン号を撃沈させられたことに対して莫大な賠償金を請求した。

イギリス政府は、本国艦隊および地中海艦隊に出動準備を命じた。また各紙はバルチック艦隊の蛮行を非難し、

「気違い犬の艦隊」

と呼んだ。

この事件の処理のしかた次第では、イギリスとロシアとのあいだで戦争にもなりかねない情勢であったので、ロシア海軍省は当惑した。

ロシア政府は、ひとまずイギリスにたいして謝罪することにし、皇帝ニコライ二世の意をうけた外相ラムスドルフ伯は、在ペテルス

ブルクのイギリス公使チャールズ・ハーディング卿をたずねると、釈明に努めた。

ロシア皇帝がイギリスのエドワード国王に伝えてほしい、といった言葉は、ロジェストウエンスキー提督からの報告にもとづくものだった。ロジェストウエンスキーは「北海事件」の原因は、誤解によるもので、はなはだ遺憾である、とした。

失しなわれた人命に対して、ロシア皇帝はイギリス国王とその政府に衷心より哀悼の意を表し、いずれ事件の全容が明らかになったら、犠牲者に応分の補償することを約束した（『タイムズ』紙、一九〇四・一二・二六付）

いったい北海事件は、なにが原因で起ったのであろうか。砲撃事件が起ったいきさつについて、ロシア側のきちんとした釈明はあったのだろうか。

北海事件に関しては、のちに国際調査委員会がもうけられ、イギリス・ロシア・フランス・アメリカ・オーストリアなど五カ国から選出された委員が出て、調査と評議をおこなうのであるが、非は明らかにロシア側にあった。

ロジェストウエンスキーとその幕僚は、おりにふれ、各国の通信員に釈明につとめている。

『エコード・パリ』のマドリッド特派員が入手し、同紙に発表した事件の真相は、つぎのようなものであった（『タイムズ』紙、一〇・二八付）。

——この事件は、起るべくして起ったものである。そもそも砲撃を命じた者は、じぶんの良心に従い、また出港にさいして与えられた命令に従って行動しただけのことである。リバウを出港したとき、ロシア艦隊に近づいてくる船に対して、砲撃せねばならないことは、だれもが承知していた。

われわれには、果たさねばならないある大きな義務があった。われわれの目的は、極東の海域に達することである。その目的を達成するためなら、何をしてでも艦隊を守らねばならないのである。われわれは、日本人がわが艦隊を襲いかねないことを承知していた。

——金曜日の夜、突如、艦隊のあいだに割り込んでくる二隻の水雷艇をみとめた。日本側の襲撃だとおもい、砲撃を浴びせた。地平線上には、漁船群の姿はなかったし、二隻の水雷艇には漁夫らしい水夫も見かけなかった。

二隻の船は、明かりを消していたか、あるいはそれをおおい隠していた可能性がある。もしそうなら、それらの船は暗闇のなかで、

流れ弾に当たっていたかも知れない。わが艦隊が、イギリスの海域で、悪気のない漁船団をわざと襲うといった犯罪的な愚行を犯したことはない（一〇・二七付、パリ発）。

この論調から分かることは、ロシア側は自己弁護につとめ、犯した行為を正当化していることである。まるでなんの罪もない、といわなければならない。

また『ゴロワ』紙は、つぎのような記事をかかげた。

——ロシアの水夫は、イギリス人に対して砲撃を加えたことはない、という。しかし、水雷艇とトロール船とのあいだで衝突はあった。トロール船は、明りをつけていなかったそうである。駆逐艦が一隻、その海域でぶつけられ、操艦不能になったというが、修理には数日かかるであろう。

『タイムズ』紙（二〇・二八付、ペテルスブルク発）によると、二十八日の午前中、海軍大臣のアヴェラン提督は、外務大臣ランスドルフを訪ね、北海事件に関してロジェストウェンスキー提督からきた報告をつたえたという。

——トロール船団のなかに姿をみせた水雷艇二隻は、日本のものであり、うち一隻を沈めたということである。ロジェストウェンスキー提督は、ロシア人がのった水雷艇は一隻もなかった、とつけ加えた。水雷艇はすべて、あらかじめシエルブル（フランス北西部、イギリス海峡にのぞむ港町）に遣ったということである。この報告は、イギリス公使館にも伝えてある。

北海事件に関する国際調査委員会の第一回目の会議は、翌年の一月にパリにおいて開かれ、その後数回ほど会合をひらき、二月二十五日に最終会議をおえた。ロシア政府は、三月十日損害賠償金六五、〇〇〇ポンドをイギリス政府に支払うことでこの問題は一応の解決をみた。

大きな過失を犯したロシア艦隊は、そのまま航行をつづけ、ヴィゴを目ざして進んでいた。けれどその後しばらくイギリスの巡洋艦隊にあとをつけられた。北海事件の真相解明は、うやむやになった感があるが、日本人犯人説がなかったわけでもない。

『タイムズ』紙（二一・二付、「皇帝と非道な行為」）は、フランス紙『エコ・ド・パリ』のペテルスブルク通信員が伝える記事を転載したものである。

イギリス公使チャールズ・ハーディング卿は、十一月一日にロシア皇帝ニコライ二世と会ったさいに、北海事件の犠牲者に対してロシア側がはじめ提示した賠償金十萬ルーブル（英貨一万ポンド）に満足の意を表明したあと、つぎのようなことをいったとされる。

——ロシア艦隊を襲ったのは、日本人にちがいない。ハルに日本人が二十名いた。その後、これらの日本人は姿を消した。ロシア皇帝は、調査委員会がロシア側の主張の真实性を証明してくれるであろう、といっている。

アバサ提督がドリュ氏（通信員の名前か）に語ったことはこうである。

——日本人は、デンマークかオランダで水雷艇を手に入れたのかも知れない。日本の水雷艇は、ノルウェーの領海に隠してあったと思われる。それが漁船団のまん中に姿を現わしたのは、食糧を手に入れるためであつたのであろう。

『タイムズ』紙は、またいっている。

——昨日（一一・一）、パリで発行されている何種類かの新聞は、デンマーク艦の司令官、ハンセン艦長がイギリスのトロール船に、日本人の姿をみかけた、といった主旨の発言をかかげた。

このように日本人による犯行をおわせるような記事を、パリの有力紙はかかげたようだが、ハンセン艦長の談話の真びょう性に異議を唱えたのは『ニューヨーク・ヘラルド』紙であつた。

同紙は、ロリアン（フランス西部、ビスケー湾にのぞむ港町）からの特電として、つぎのような記事をかかげた。

——けさブレストの新聞に掲載された陳述には、何んらの真实性もないのである。その趣旨はつぎのようなものである。

バルト海からロリアンにやって来たブリグ型帆船「アニー・フォルイェン」号の船長は、北海で操業していたイギリスの蒸気トロール船に日本人が乗っていたこと、またイギリスのトロール船群は日本人が用いるための爆薬を積んでいたことを確認した、というものである。

——わたしはハンセン船長に会ったばかりである。船長はデンマーク人ではなく、ノルウェー人である。かれはいま述べたようなことを見たこともましてや人にいったこともないから、この話は真つ赤なうそということになるう。

ハンセン船長によると、九月二十三日にヴィボル（デンマークのユトランド半島中北部の港町）を出帆し、カテガット（バルト海と

北海をむすぶ海峡）を通り、同月三十日に北海に入ったという。船はハルやその他のイギリスの港に寄港しなかった。が、十月八日、ドッガーバンクに達した。

十月十日、ハルとほぼ同じ緯度である、北海の真ただ中でイギリスの漁船群をみたという。同月十二日、ヤーマス（イギリス東部、ノーフォーク州の港町）とむきあう海域にいたり、十三日にはドーバー海峡に達し、二十二日にはロリアンに入港した。

航海中、ハンセン船長はロシア人や日本人の姿をみてはいない。ましてやどんな怪しい船も爆薬を積んだどんな船も見えてはいない。このように『ニューヨーク・ヘラルド』紙の記事は、プレストの新聞記事の信びよう性にうたがいの目をむけているのだが、フランスのアヴァス通信社は、こともあろうにプレスト紙の肩をもつような情報をバリの各紙に流したのである。

情報源はロリアン駐在のある領事官とされているが、ハンセン船長の陳述が正しいことを確認したという。

おそらくロシアの諜報機関が、バルチック艦隊が犯したへまを隠ぺいするために、フランスの新聞社や通信社を買収して、自国にとってつごうのよい情報を流し、国際世論を静めようとしたものであろう。

一方、被害側のハルの漁船団から見たこの砲撃事件の真相はどうであったのだろうか。

漁船隊長トーマス・カーが率いる小型のトロール船三十隻（「しゃも船団」）がハルの港を出たのは十月十九日のことであり、スパーン岬の東微北二二〇マイルの漁礁（「ドゥガーバンク」）に達すると、イギリスの北東海岸の港からやって来た他の百隻以上の船とともに操業を開始した。

事件が起った十月二十一日といえば、奇しくも

「トラファルガル海戦」

の記念日であった。

ネルソン提督が指揮するイギリス艦隊が、一八〇五年十月二十一日トラファルガル岬の沖合でフランス・スペインの連合艦隊を破った、記念すべき日であった。

深夜、ハルのトロール船団は、北緯五十五度十五分、東経五十五度六十五分あたりの地点で綱をひき、魚をとらえると、それを洗っ



たり、はらわたを取り出したりしていた。漁船隊長のトーマス・カーは、ふしぎな光を放っている黒い船が何隻か近づいてくるのに気づき、やがてそれがロシア軍艦四隻であることがわかった。

軍艦は漁船の近くまでやって来ると、探海灯で照らしだした。にもかかわらず、各漁船の乗組員は、何事もなかったように仕事をつづけていた。漁夫らははじめそれらの軍艦を見たとき、イギリス海軍の軍艦だともい、何かの演習を行っているのだと考えた。

すると突如、各艦から砲弾や銃弾が雨あられのように飛んできたので、皆すっかりうろたえてしまった。砲撃は十分か二十分間ほど続いたらしい。この砲撃によっていちばん被害を受けたハルの漁船は、

クレイン号（一九〇二年建造、二〇〇トン） 被弾損壊のうえ沈没

ミーノ号 被弾損壊

モウルメイン号 被弾損壊

スナイプ号 被弾損壊

マジエスティック号 被弾損壊

などであった。クレイン号の船長ジョージ・ヘンリー・スミス（ハル市リブル街七番地）と同船の乗組員ウィリアム・リチャード・リケット（ハル市カールトン街フローラ通り十五番地）の両人は、被弾のうえ死亡し、ミーノ号の船長ウォルター・ウェルプトンも砲弾をうけて死亡した。

その他負傷した漁夫も少なくなく、二十九名が負傷した（『ズイ・イースターン・モーニング・ニュース』紙、一九〇四・一〇・二四付）。この事件が起って二日後の十月二十三日（日曜日）の正午ごろ、モウルメイン号とミーノ号が“穴だらけ”の船体をさらけ出しながらハルに帰港すると、ロシアの軍艦に砲撃をうけた旨税関の役人に報告した。税関吏のホートンは信じがたい様子だった。が、三人の死体や穴だらけになった船を見せられたとき、はじめて事の重大さを知った。

漁船団がロシアの軍艦に襲われた、といったニュースは、またたく間に町中に広まった。家族の身を案じる者たちが急きょ波止場に集まり、また街路は憤った群集でいっぱいだった。

その夜のうちに、「しゃも船団」の代表が、国会議員のヘンリー・シーモア・キング卿に伴なわれて、郵便列車でロンドンにむかった。

かれらは早朝、外務省に着くと朝食を供された。外務大臣のランズダウン卿は不在であったが、職員が二名一行を待っていた。ヨーロッパの各紙は、すでに朝刊の大見出しに北海事件を取りあげていたから、それについて知らぬ者はいなかった。しかし、職員は念のために攻撃を受けたことの証拠を求めた。漁夫のひとりが叫んだ。

——これはハルの北で起った事件です。首のない胴体が二つもあるんです。

話を聞いていた漁夫たちは、証拠としてめいめいポケットから砲弾（長さ十二インチ）の破片を取り出して見せたので、役人もはじめて納得した様子を示した。

ロンドンの市も北海事件のうわさで持ち切りだった。トラファルガル広場は抗議する群集でいっぱいとなり、駐英ロシア公使は馬車で公使館を出てゆくとき、抗議者からやじられ、また公使館に対する投石もおこなわれた。

チャールズ・ベレスフォード卿が指揮するイギリス艦隊は、事件の現場にむかった。ハル市長のもとには弔電が引きも切らず舞い込んだ。東京市長も如才なく弔電を送った。事件の犠牲者に対してイギリス国王は二〇〇ギニー、女王からも一〇〇ポンドの見舞金（小切手）が寄せられた（『ザ・ディリー・メール』紙、一九〇四・一〇・二五付）。

イギリスの一般世論はロシアの非道な攻撃に激怒したために、ロシアと戦争になるかと思われたが、イギリス政府は同国と戦争をはじめつもりはなかった。ペテルスブルクに駐在するイギリス公使は、ロシア政府に対して抗議文を手渡し、事件の説明と謝罪と砲撃を命じた士官の処罰とを強行に申し入れた。

イギリス側の要求は、

- 一 正式の謝罪。
- 二 被害者にたいする相応の賠償。
- 三 暴行の士官にたいする懲罰。

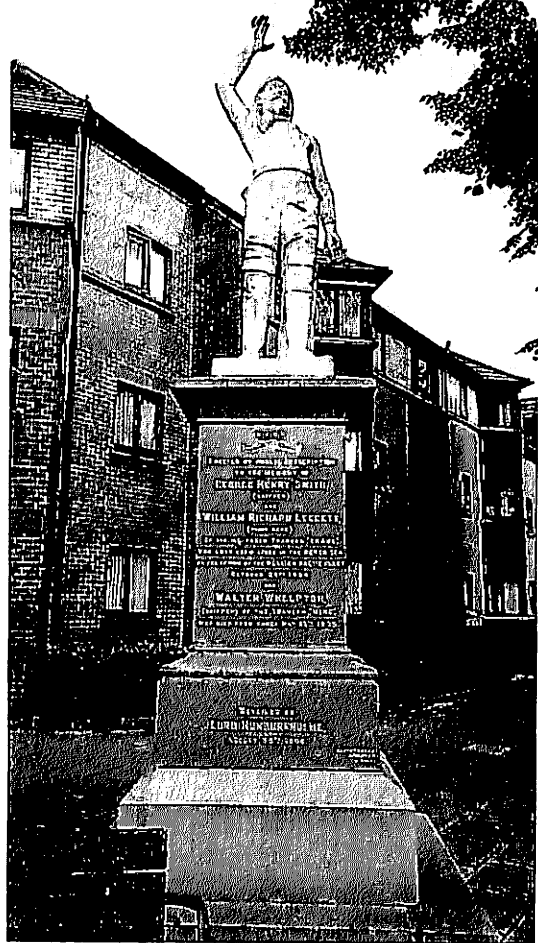
Station. Owing to the thick weather it is impossible to see any great distance seaward.

#### CAPTAIN SMITH.

Mr John K. R. Suddaby, of the St. Andrew Pharmacy and Photographic Stores, Havelock-road, supplies us with the above photograph of the deceased captain. It was taken at the beginning of last year on the Promenade, at St. Andrew's Dock.



スミス船長の肖像  
The Daily Mail 紙  
(1904・10・24 付) より。



ハル市にある北海事件の犠牲者の記念碑  
およびスミス船長の立像（筆者撮影）。

#### 四 今後このようなことが起らぬことを保証すること。

などであった。

十月二十五日、ロシア外相のラムスドルフ伯は、イギリス国王とその政府に対するロシア皇帝の慰問状を手交した。が、ロシア海軍省からは文書や口頭による陳謝もなければ、バルチック艦隊に関するその後の動きについても、いっさい説明はなかった。

パリにおける国際調査委員会の裁定をうけて、ロシア政府は六五〇〇〇ポンドの賠償金をイギリス政府に支払うことで、北海事件は一応収拾した。賠償金は船主や犠牲者の家族などに渡された。

クレイン号の船長ジョージ・ヘンリー・スミスと乗組員のウィリアム・リチャード・リケットの二人だけは、ハルの「ウェスターン墓地」に埋葬された。一九〇六年八月ブルヴァードとヘッスル街とが交差する角に、北海事件の犠牲者の記念碑が建てられいまに至っている。記念碑の人物は、未亡人と子供八名を残して逝ったクレイン号のスミス船長のものである。

\*

北海事件について、日本のマスコミはイギリス紙に比べて大だに報じることにはなかつた。東朝は十月二十四日にロイター電として、「行きがけの駄賃とばかり露艦隊、英国漁船隊を撃沈 英国の与論漸次硬化せんとす」の見出しのもとに、ハルに帰港した漁船団の報告を伝えた。ついで十月二十八日、「露国艦隊暴行事件 英国憤慨して海峡封鎖の準備を為す」といった小さな記事をかかげた。

十月三十日付の記事は、ベルリン発のものであるが、イギリスはハーグ条約に従い、本件を仲裁々判所に申し出たこと、ロシア側も損害の賠償および責任者の処罰問題は、ハーグの裁判所の判決によるとし、両国の談判はいまも進行中と伝えている。

ハルの『ズイ・イースターン・モーニング・メール』紙（一九〇四・一〇・二八付）によると、日本の有力紙は、イギリス漁船が日英同盟のあおりを食って今回のような迷惑をこうむったことに対して、遺憾の意を表し、また東京市長は、ハル市長に宛てて、犠牲者の寡婦と遺児のために、弔電をことづけたという。

北海事件を総括すると、何が原因でこの事件が起つたのであろうか。平たくいえば、バルチック艦隊がロシア本国を出港したときから、上は司令長官から下は兵にいたるまで、幻の日本水雷艇に取りつかれ、神経過敏になっていた。それが極に達していたころ、暗夜に怪しいのろしや舷灯を目撃したために、それをてっきり日本の水雷艇のものと思いこみ、誤って砲撃してしまった。つまり神経過敏症がこうじて笑うに笑えぬ忘想が生じ、その発現が誤爆となったといえる。

近代戦はいわば情報戦でもあるから、日本側の諜報員も流言を放っていたかと思われるが、日本海軍の方針は奸計を用いることなく、正々堂々と勝負に出る肚であつたから、ロシア紙『ススコフスキヤ・ウェドモスチ』紙（一〇・二六付）の「魚類ヲ売ラント信号ヲ籍<sup>か</sup>リテ 艦隊ニ近キ<sup>ちかづ</sup> 水雷ヲ発射スルノ計画ナキヲ保シ難シ」といった疑惑は、はなからすてねばなるまい。

いずれにせよ、北海事件は、ロシア側が日本海軍の水雷攻撃にたいしてひじょうに神経過敏になっていたことの左証でもあつた。

# 参考文献

- 外務省編纂 『日本外交文書 日露戦争 I』(財団法人日本国際連合協会、昭和三十三年十二月)  
 外務省蔵版 第三十七卷  
 『日本外交文書 日露戦争IV』(財団法人日本国際連合協会、昭和三十五年三月)  
 第三十八卷 別冊  
 『日露開戦記 全』(明治三十九年七月、秀光社印刷)  
 『露艦隊三戦記(明治四十年十一月、秀光社印刷)  
 ウラヂミール・セメヨノフ原著 『戦敗露艦隊全滅行』(大正二年十月、武俠世界社)  
 押川方存訳 秘録  
 フランク・ティース著 『ツシマ 日本海々戦記』(昭和十八年一月、大観堂)  
 藤原鑑訳  
 ノビコフ・プリボイ原著 『バルチック艦隊の潰滅』(昭和四十七年四月、原書房)  
 上原進訳  
 デニス・ウォーナー、ヘギー・ウォーナー原著 『日露戦争全史』(昭和五十三年十月、時事通信社)  
 妹尾作太男、三谷康雄訳  
 雑誌『東郷』バックナンバー(東郷会蔵)  
 雑誌『東郷』バックナンバー(東郷会蔵)  
 Cap. Vladimir Semenov: *The Battle of Tsushima*, John Murray, London, 1906  
 Eugène S. Poltovsky: *From Libau to Tsushima*, John Murray, London, 1908  
 A. Novikoff-Priboy: *Tsushima*, Alfred A. Knopf, New York, 1944  
 Richard Hough: *The Fleet that had to die*, Severn House Publishers, London, 1958  
 Brian Lewis, David Prudhoe, Judith Bingham and Christopher Ketchell: *The Day the Russian Imperial Fleet fired on the Hull Trawlermen-1904*, A People's History of Yorkshire V, 1983  
 The New York Times (1904・10・24～10・31)  
 The Times (1904・10・24～10・31)  
 The Daily Mail (1904・10・24～10・31)  
 Hull Daily News (1904・10・24～10・31)  
 The Eastern Morning News (1904・10・24～10・31)  
 The Hull News (1904・10・24～10・31)